

NFRJ98・NFRJ08・NFRJ18 からみる高齢期の家事労働における時系列変化

金兌恩（東京大学大学院）

1. 問題背景及び研究目的

日本内閣府男女共同参画局の「男女共同参画白書平成 29 年版」によると、日本社会における「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という性別役割分業意識は、長期にわたって変化している傾向である。男女ともに、反対している割合が増加し、賛成している割合が減少し、2016 年には、反対の割合が賛成の割合を上回っている。先行研究では、性別役割分業意識と既婚男女の家事や育児への参加に関する研究がなされてきた（岩井 2000; 佐々木 2012; 西野 2011, 2015; 西岡・山内 2017）。だが、性別役割分業意識の変化に関わらず、既婚男性の一日当たりの家事や育児の遂行時間はそれほど変化がなく、他国と比べ依然として低いことが指摘されている（西岡・山内 2017）。国立社会保障・人口問題研究所による「全国家庭動向調査」の結果でも妻が夫より多くの家事を担っていることが確認された。性別役割分業意識の変化はみられたものの、実際の家事の遂行においてはそれほどの変化は見られないことがわかる。

しかし、これらの研究の多くは、有償労働を行なっている現役期の家事労働についての解明が目指され、「高齢期の家事労働」については注目されなかった。有償労働から解放された高齢期には、性別役割分業体制がもはや当てはまらない時期である。すなわち、高齢期には、男性（夫）における役割の転換が必要になり、女性（妻）も年齢による可能な家事労働の範囲が変化するため、家庭内役割または夫婦の役割について再調整を行う必要がある（Sung and Oh 2014）。このような高齢者の家庭内役割は、高齢期の夫婦関係の満足度にもつながるため重要な問題の一つである（Kim and Choi 2011）。そのため、高齢期における家事労働を検討することは、高齢期にありうるジェンダー格差を明らかにすることができる。また、高齢期のジェンダー格差を検討することで、ジェンダー格差に関する議論の幅がより広がる。

そこで、本報告では、日本家族社会学会からの「家族についての全国調査」のデータを用いて、高齢期の家事労働の現状を確認し、高齢夫婦の家事分担を現役世代夫婦の家事分担と比較することによって高齢期のジェンダー格差を明らかにする。また、高齢期の家事分担がどのように変化してきたかを検討する。

2. データと方法

本報告の分析の際には、「全国家族調査 (NFRJ)」の NFRJ98, NFRJ08, NFRJ18 のデータを用い、分析を行う。これらのデータは、①65 歳以上の高齢者を含んでいること、②現役世代との比較ができること、③本人の家事遂行頻度と配偶者の家事遂行頻度を尋ねているため、分析に適切である。本データを使用し、高齢夫婦の家事分担の現状を把握し、現役世代との比較を行う。また、高齢夫婦の家事分担の時系列変化を検討する。

（キーワード：家事労働、家事分担、高齢期、ジェンダー格差）